

課題名 教師のライフコースにおける職能成長と研修の意義に関する調査研究

—東北大学教育指導者講座受講者の追跡調査を通して—

研究代表者名 清水 禎文 (教育設計評価講座)
研究組織等 宮腰 英一 (教育政策科学講座)
後藤 武俊 (教育設計評価講座)
泉山 靖人 (教育情報学研究部)
大迫 章史 (仙台白百合女子大学)
金井 徹 (尚絅学院大学)
新川 壮光 (教育設計評価講座・D3)
小田 浩一 (宮城県仙台南高校)
池田 和正 (宮城県仙台第二高等学校)

研究の目的と方法

本調査研究は、東北大学教育指導者講座受講者の追跡調査を通して、教師のライフコースにおける職能成長と研修との関連について明らかにすることを目的とする。

東北大学教育指導者講座は、半世紀にわたる本研究科の開放講座である。過去 10 年間の受講者を対象として、①教師のライフコースについて実態的に解明すること、また②彼らの職能成長・キャリア形成の中で東北大学教育指導者講座の占める意義を明らかにすること目的とする。最終的には受講者の実態に即したカリキュラム開発を図ることにより、教育指導者講座のいっそうの充実に資することを目標とする。

調査は質問紙調査である。質問紙は、10 年前に実施した調査研究を踏まえて実施するものであり、10 年前の質問紙に基づき、若干の修正を加えて作成する。

研究経過

上記題目での質問紙調査実施を予定していたが、教育学研究科倫理審査委員会から名簿の目的外使用に抵触する恐れがあるとの指摘を内々に受けた(5月)。このため、研究計画を根本的に改め、東北大学教育指導者講座の受講経験のある先生方の協力を得て、研究計画を練り直し、最終的には宮城県高等学校理科教育研究会の協力を得ることができた。

研究題目は、「高校理科教員の研修経験と指導方法に関する調査研究」と改め、高等学校理科教員の研修経験と指導方法(授業方略に関する項目、学級・学校経営に関する項目、地域連携に関する項目)に焦点を絞り、質問紙調査を実施することにした。調査対象は高等学校の理科教員に限定されたが、当初の研究目的である教師のライフコースを通じた職能成長と研修の意義および効果について調査を行うこととした。

質問紙は2014年6月から7月にかけて作成し、倫理審査委員会の承認を得た(8月承認ID:14-1-009)。理科教育研究会の了解を得て、同会会員名簿に基づき、9月に質問紙調査を実施し、9月末に質問紙を回収した。

調査結果は10月から11月にかけて分析し、理科教育研究会長には調査結果の概要を報告した(11月)。

さらに分析を進め、3月7日の東北教育学会第72回大会において研究報告を行った。

研究の成果

年度内の研究成果は以下の通りである。いずれも速報である。今後、詳細なデータ解析を行い、さらに成果報告を行っていく予定である。

- 1 ・2015年3月7日 東北教育学会第72回大会・自由研究報告
 - ・清水禎文・池田和正「高校教員の研修経験と指導方法に関する調査研究」
 - ・概要：今日、「知識活用型の教育」というスローガンの下、教育改革が進みつつある。この教育改革の鍵を握る一つの要因は教員のマインドセットの転換であり、それを促す教師教育システムの再構築である。本研究においては、研修経験と指導方法との関わりを検証することを目的として、高校理科教員を対象とする質問紙調査を行った。調査の結果、以下の事柄が明らかになった。①高校理科教員においては、専門とする科目のより専門的な知識、実験指導のためのスキルに関する研修機会が多く提供されていること、そして教員はこれらの研修をさらに望む傾向(高い教科専門性)がある。②希望研修先として、教育センターの希望研修、理科教育研究会、大学開放講座が多く望まれている。③時代の新たな教育課題に対応する研修もなされている(アクティブ・ラーニングなど)。④多くの教員は、今後、科目や教科の枠組みを超える科目・教科横断的な教育実践の必要性を認識している。全体としては伝統的なタイプの研修とそれによる職能開発が大きな比重を占めているものの、時代の変化に対応する研修が模索されつつあることが確認された。
- 2 ・2015年3月7日 東北教育学会第72回大会・自由研究報告
 - ・池田和正「高校理科教員の教科・科目を横断した授業実践経験と指導方法に関する調査研究」
 - ・概要：高校理科教員における授業実践での指導方法の現状として、多くの教員が取り組む授業方略として、「始めにねらいをつかむ説明」「机間指導による把握」「助言等で自力解決を支援」「誤答は理解へのチャンス」「推論や説明を引き出す発問」「知識を引き出す発問」が挙げられる。これに対して、個人差の大きい授業方略は、「正答がいく通りにもなる内容」「さらに向上をする方法を助言」「主体的に探究するやり方」「他者の考えの良い点を取り入れる」「助け合って問題を解決」「自己の学習状況を把握させる」であった。前者は伝統的な授業方略であるのに対し、後者は新た

な教授学習上の課題であり、ここにおいて個人差が大きくなっている。そしてこの個人差と科目・教科横断的な授業実践経験の有無とは相関関係が認められた。